著に表れています。山と里、人間と獣、文化と自然の想像力の架橋の中から誕生した、「山姥と金太郎」の物語が配置されているのです。母子説話に、文化の中の異和性の光源、生命の根源を夢想してやまないのです。

この本は、子どもにお話をする時に、お話を取り出す宝箱になることでしょう。また、自分の動物観・生命観を考えなおす手がかりにもなるでしょう。私は、鮭の話が収録されているものの、鯨、鯰、蛸、烏賊、それに魚と、海の動物の物語が少ないのが気になります。地球環境が壊され、森や山野から動物が消え出し、海の神秘が浮上しています。巨大水族館が次々と生まれていますが、今、最も、〝生〟の神性を新しくになうのは魚ではないでしょうか。大都市で魚たちは、海を賦活する周縁へと誘うかのように、夢想の海を泳いでいるのです。私たち日本人の祖先が山人か海人か里人か、『古事記』以前の、言葉以前の彼方へと導いてくれるのは、動物のイメージだけなのかもしれません。

（十文字学園女子短期大学）

# 子どものごっこ遊びを楽しみ、理解するために

『「ごっこ」の構造―子どもの遊びの世界』

C・ガーヴェイ　高橋たまき訳　サイエンス社　一九八〇

『想像と現実―子どものふり遊びの世界―』
高橋たまき　ブレーン出版　一九八六

『ごっこからファンタジーへ―子どもの想像世界―』
内田伸子　新曜社　一九八六

『子ども心と秋の空―保育のなかの遊び論―』
加用文男　ひとなる書房　一九九〇

『なぜごっこ遊び?―幼児の自己世界のめばえとイメージの育ち―』
今井和子　フレーベル館　一九九二

内田　伸子

保育の目標は、一人一人の子どもが自分で考え、工夫し、判断することができるようになること、いわゆる「自律性」を育むことにあると思われます。保育の仕事はそのような子どもの育ちに手を貸すところにあると考えられます。そのためには、子どもの発達の姿をしっかり捉え、子どもの心の動きを瞬間瞬間、把握することが必要になると思います。

日々展開する遊びは、子どもを理解する手がかりを与えてくれるものですが、とりわけ「ごっこ遊び」とか「ふり遊び」と呼ばれる遊びは、観察していても楽しく、興味がひかれる遊びです。こ

のような遊びは、子どもの発達にとってどんな意義があるのでしょうか。ごっこ遊びを観察して楽しむだけでなく、共感的に理解し、またそれを通して子どもの育ちや心の働きを知るために、この遊びに焦点をあて、様々な面からアプローチした本のうち、ここ十年余りの間に出版され、保育の現場におられる先生方に一度は読んでいただきたい本を五点、紹介したいと思います。

ごっこ遊びでは会話の内容や声の調子にまず興味が引かれます。一番目の『「ごっこ」の構造―子どもの遊びの世界―』は、ごっこにおける会話の構造をあざやかに描き出してくれるだけでなく、ことばを手がかりに子どもの発達を捉える方法についての一種の枠組みを与えてくれます。ことばに興味のある先生方には特にお勧めしたいと思います。

二番目の『想像と現実―子どものふり遊びの世界―』は、子どもの遊びの研究者が、ふり遊びを通して子どものイメージの形成、イマジネーションの発達を解明しています。また、ごっこ遊びの中で、現実世界とは別の虚構世界が創られるということは、人間生活を維持し発展させ、豊かなものにする活動空間を増やすことになり、そこにごっこ遊びの意義が認められるということを、筆者の緻密な観察と考察を踏まえて描き出していきます。

三番目の『ごっこからファンタジーへ―子どもの想像世界―』は筆者のものですので、推薦図書として掲げるのは多少ためらわれたのですが、ごっこ遊びと言語発達、特に、ディスコース（文章）の発達過程と関係づけ、そこに想像力や思考力がどのように絡まっているかを保育室での観察のデータや実験手法を用いて明らかにしたものです。ごっこ遊びは保育室でのお話づくりや劇づくりへと発展しうるのはなぜかについて考えるヒントが得られましょう。さらに、子どもの心の動き

を捉えながら、自律性を育むための保育者の援助のあり方についても提案しています。

四番目の『子ども心と秋の空―保育のなかの遊び論―』は、保育観察に従事してきた遊び研究に筆者が、保育観察を通して拾ったなにげないエピソードについて独特の切込み方をして、遊びのもつ意義について深い論考を展開しています。子どもの遊びの面白さについて目のさめるような指摘がたくさんなされています。

五番目の本は、優れた保育者、今井和子先生が保育しながら気になった保育事象をすくいとり、記録することを通して子どもへの理解が深まっていく過程が手に取るようにわかる良書です。本書は、何気ない子どもの小さな行為からごっこ遊びが発生していく過程を追うという横軸と子ども理解という縦軸を巧みに織り合わせながら、子どもの育つ姿を余すところなく生き生きと浮かび上がらせてくれます。

以上の五冊は、ごっこ遊びを対象にしながらも、扱い方の視点はそれぞれ異なりますが、いずれも、平易な文章の中で、子どもの発達を見すえる目の確かさが感じられます。また、行間には子どもの心の動きに対する著者の温かいまなざしと洞察力があふれ、保育事象の確かな捉えと分析力に裏打ちされた文章は読みごたえがあり、読むものの心をうつものと思います。

それぞれ、力点が違いますので、明らかにしたい問題に焦点をあてている本を選んでもよいですが、全部を読み通し、様々な切込み方を比較することによって、ごっこ遊びへの接近の仕方についての示唆が得られるものと思います。また、ごっこについての捉え方を相互に比較することを通して、ごっこ遊びについての見方が深まり、子どもの発達の姿を捉えるための何らかのヒントが得られるのではないかと思われます。

（お茶の水女子大学）